

## 編集委員会依頼論文

石貨、暗号通貨そしてブロックチェーン：  
小さな社会で生まれた知恵を大きな社会に生かす<sup>1</sup>

佐々木 宏夫\*

2022年1月12日投稿

## 1. はじめに：オセアニアとミクロネシア

日本のほぼ南に広がっている太平洋上の海域とそこに浮かぶ島々をオセアニアと呼ぶ<sup>2</sup>。オセアニアの広大な領域は、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアに分かれている。

ポリネシアは、日本から見て太平洋の南東方向に広がるオセアニアではもっとも広い海域であり、ほぼ三角形の形状をしている。ニュージーランド、ハワイ諸島、そしてラバ・ヌイ（イースター島）が、それぞれその三角形の頂点におおよそ位置している。メラネシアは、ポリネシアの西方、ミクロネシアとオーストラリア大陸に挟まれたエリアであり、ニューギニアやフィジーなどがそこに含まれている。そして、メラネシアの北方で、日本に一番近いエリアが、「石貨の島」ヤップ島が含まれるミクロネシアである。

ミクロネシアにはたくさんの島があり、その中に、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国、ナウル共和国、キリバス共和国<sup>3</sup>の独立国がある。またそれ以外にグアムやサイパンなどのように、アメリカ合衆国の施政権下にある島もある。

この地域については、考古学的な知見の蓄積が乏しく<sup>4</sup>、さらに文化人類学者の研究についてもメラネシアやポリネシアと比べると研究の蓄積が少ないので、かつては無人であった考えられるミクロネシアの島々に、いつどのあたりからどういう経路で人々が移住してきたかについて確実なことはわかっていない。

ただ、乏しい考古学的知見や言語学的知見などを辿ってみると、最初にこの地域にやってきた人々は、おおよそ三千数百年ほど前にフィリピン北部もしくはその近くを出発点として、現在のマリアナ諸島あたりに移住してきた人である可能性が高いと考えられている<sup>5</sup>。なお、この移住はミクロネシアの各島に対して同時に行

\* 早稲田大学名誉教授

<sup>1</sup> 本稿は2021年10月16日にオンラインで開催された日本保険・年金リスク学会（JARIP）の第19回研究発表大会における私の特別講演「石貨とブロックチェーン」に基づいて執筆したものである。本講演の実現のためにご尽力くださった同学会の大会担当理事の先生方、とりわけ早稲田大学大学院会計研究科の大塚忠義教授に感謝の意を表したい。また、本稿の執筆にあたっては、早稲田大学の森郁夫名誉教授から有益なご示唆をいただいた。大森先生にも感謝申し上げたい。

<sup>2</sup> オーストラリア大陸については、そこをオセアニアに含めるべきだという意見と含めるべきでないという意見があるが、本稿が関心の対象とするのはオセアニアの中のミクロネシアなので、ここでの議論においてその点は本質的でない。

<sup>3</sup> キリバス共和国については、ギルバート諸島がミクロネシアに含まれるが、フェニックス諸島とライン諸島はポリネシアに含まれている。

<sup>4</sup> 古来ミクロネシアの人々は海岸沿いに居住することが多かったため、墳墓や住居跡など、考古学的な研究対象になり得る文物が侵食等によって失われている場合が少なくないという。なお、ミクロネシア連邦ポンペイ島には、主に紀元後1000年くらいから数百年間の歳月をかけて構築された複数の人工島群上に建造された巨石遺跡のナン・マドール遺跡がある。この遺跡は2016年にユネスコの世界文化遺産に登録されたが、保存状態が良くないので登録と同時に危機遺産リストにも登録された。なお、この遺跡については、日本人考古学者である長岡拓也博士などをはじめとする研究者によって、精力的な調査研究が行われている。